

雲南省大理白族の 大本曲の歴史とその現状

立石 謙次

はじめに

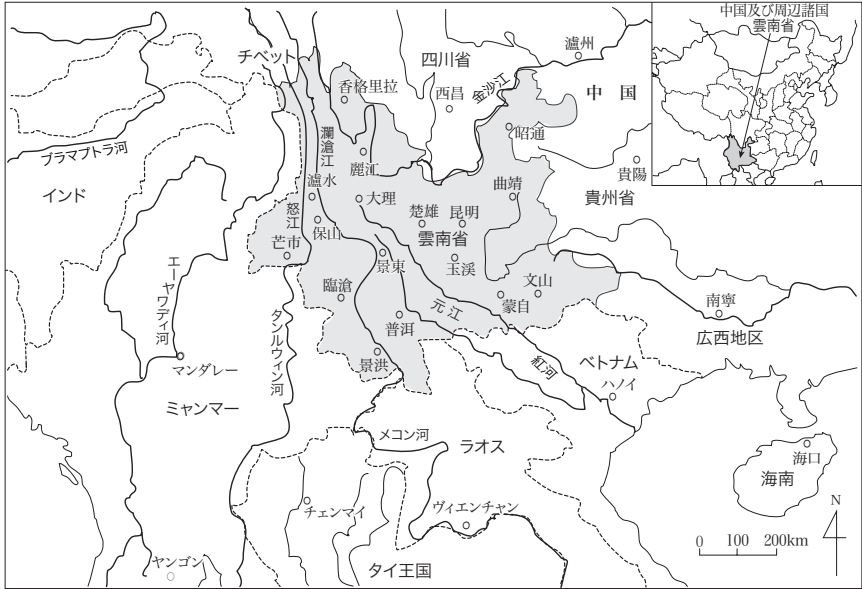
中国西南端に位置する雲南省には、漢族以外にも二三もの少数民族が住んでいる。本稿では雲南少数民族の一つである白族（ペー族）の民間芸能である「大本曲」に注目し、その歴史と現状について考察する。なお白族の言葉である白語（ペー語）は大理州北部の中部方言（劍川方言）、大理盆地を中心とした南部方言（大理方言）、雲南西北部の北部方言（碧江方言）¹とに分けられる〔徐琳等編著 1984: 7〕。本稿で注目する大本曲は、南部方言地域に伝わる芸能である。このため特に説明をしない場合、白族とは南部方言地域の白族を、白語とは南部方言のことを示す。本文中の白



語の発音は、現行のローマ字白文によって示す〔楊応新等編著 1995、王鋒編著 2014〕。ローマ字白文と国際音声表記（IPA）との対応は文末に示す。また引用文中の（ ）内は引用者による説明、〔 〕内は引用者による補足である。

大理白族について

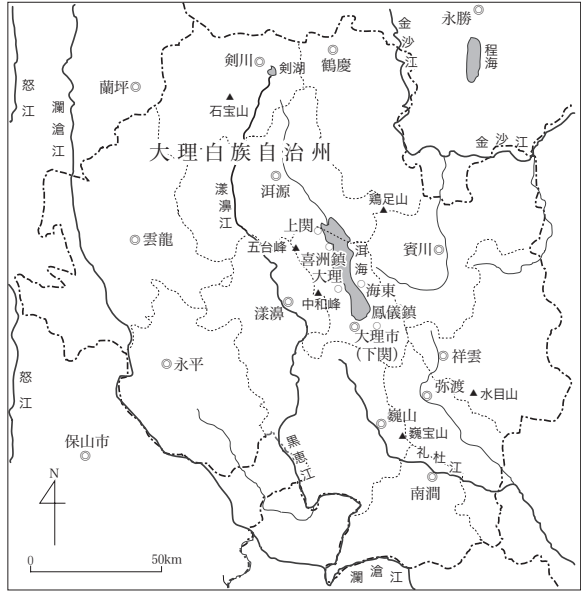
白族の人口は約一九五万人（二〇一〇年）、そのうちの約一〇〇万人が雲南省西部の大理白族自治州（以下大理州と略称する）に多く暮らしている〔王鋒編著 2014: 5〕。この大理州の中心が大理盆地である。大理盆地における白族の民俗誌については、フィッツジェラルド（C. P. Fitzgerald）が中華人民共和国成立以前の一九三六年から一九三九年



地図1 雲南省地図

に、大理において当時「民家」(Min Chia) と呼ばれていた白族の生活・文化・宗教・言語などの幅広い関心のもとに調査をおこない、紹介している [Fitzgerald 1941]。またフランシス・シュー (Francis L. K. Hsu) も中華人民共和国成立以前の大理地方の western town の調査をもとに、その生活を叙述する [Hsu 1971]。横山廣子は一九八〇年代から大理盆地の白族の調査をおこない、その周辺に暮らす漢族やイスラーム教徒である回族との関係性を明らかにした「横山 1987」。

現在の研究では、白族の先祖は現在の雲南地方を中心に展開した南詔国 (八世紀半ば―九〇二)・大理国 (九三七―八一二五三) の支配層である「白蛮」と呼ばれる集団だと考えられている。一二五三年、大理国はモンゴルのモンケ・カアン (在位一二五一―一二五九) の命を受けた弟のクビライに滅ぼされる。しかし大理国皇帝家の段氏は元朝によって官職を与えられ存続が認められる [林 1996: 97]。『元史』巻一六六には、大理国最後の皇帝たる段興智の弟である段信直日の伝が立てられている。これによれば段信直日は「僰人」とされている⁽³⁾。元の李京「雲南志略」 「雲南総叙」によれば、「古くは中慶 (今の雲南省昆明) ・威楚 (今の雲南省楚雄) ・大理・永昌 (今の雲南省保山) は皆な僰人 (「が住んでいる」)。転じて「彼らは」白人ともされている」という。このように元朝統治下に組み込



地図2 大理白族自治州地図

まれた雲南において白蛮は、「粟人」、あるいは「白人」と記されるようになる。現在白族の自称の一つである「Bai」は、この「白人」に由来する。

ただし現在の白族のほとんどは、自分たちを南詔国・大理国の末裔であるとは考えていない。自らの先祖を明・洪武一四年（一三八一）前後に、中国の南京よりこの地に移り住んだ漢人だと考えている【牧野 1985:149-157】。

この説話が広く白族に伝わっている背景には、以下のような歴史的状況がある。明の洪武一四年、明朝軍は大挙して雲南に侵入した。翌洪武一五年（一三八二）閏二月、明軍は大理を占領した。大理国皇帝の末裔である段世が捕えられ、段氏は滅亡し、元朝統治下の雲南は征服された【奥山 2003: 206】。そして大理盆地には大理府城と太和県が設置された。さらに明朝は雲南制圧のために、雲南全土に衛所を設置して、大量の漢人を移入させ、雲南社会に大きな変化を与えたという【方国瑜 2003: 121】。しかし前述のように、これ以前にも雲南における白人の存在は史料上確認できるため、白人の祖先のすべてが明代以降中国からやってきた漢人であるとするのは疑わしい。

時代が下り、明・天啓年間（一六二一—一六二七）に劉文徴が纂修した『滇志』巻三〇「種人条」の白人の項には、「滇郡（現在の雲南省昆明）およびそれ以西の諸府では、過半数がこれ（白人）である。習俗は華人とそれほど遠くはない」と記される⁵⁾。これによれば昆明以西の多数派である白人たちの風俗習慣は漢人たちに近いと認識されていた。しかし白人の居住地域は次第にせばまっていたと考えられる。康熙三三年（一六九四）序刊、李斯佺等修の康熙『大理府志』巻二・風俗条には、「趙州（今の大理州鳳儀）、雲（雲南県、今の同州祥雲・弥渡県）、賓（今の同州賓川県）には、だいたい漢人が多く、太和（今の同州

大理市)、鄧川(今の同州洱源县鄧川鎮)、浪(浪穹県、今の同州洱源县)には、だいたい白人が多い」とあり、清・康熙年間(一六六二—一七二二)になると、大理府の中でも、大理盆地の太和県とその北の鄧川・浪穹にのみ、なお白人が多かったとされる。この分布は、現在の大理州中部における白族の居住地域の分布に近い。さらに同書同巻同条の太和県項には「(太和県の)種族には白人が多い。習俗は漢人と等しい。その外より来て長く(時がたつと)、子孫も今はまた土着(白人)となった」とあり、当時、白人の習俗は漢人と「等しい」と称されるようになっていた。一方では流入した漢人が現地文化に取り込まれるということもあった。

前述のように白人はまた「民家」とも呼ばれていた。中国による雲南征服後、漢人の多くは軍人として雲南地方に移り住み、軍戸として王朝支配に組み込まれた。一方、土着の白人たちは民戸に組み込まれたことによると考えられる。民家の名称は、一九四九年の中華人民共和国成立後も使用され、一九五六年にはじめて正式に「白族」の名称が用いられることになった。⁶⁾

白語と白文

白族は白語と呼ばれる独自の言語をもっている。白族の

全人口一九五万人中、白語の話者人口は、約一三〇万人とされている[王鋒編著 2014: 57]。白語がどの言語に属しているかという問題については、いまだ確定しておらず、大まかにみると以下のような説があげられる。(1)チベット・ビルマ語派イ語系、(2)あるいはチベット・ビルマ語派白語としてチベット・ビルマ語派の中で独立しているもの、(3)漢語との密接な関係に注目し、漢・白語派白語という独立言語とみなすものがある。ただし現状ではチベット・ビルマ語派に属する言語だというみかたが主流である[王鋒編著 2014: 57]。白語が、大きく三つの方言区に分けられることは、先に述べたとおりである。

白族およびその先祖は、基本的には自分たちの文字を持たず、文章は漢語を用いて書いた。ただし一部で「白文」(ペー文)と呼ばれる漢字を用いて、白語を書き写す方法をもっていた。白文は、本稿で問題とする大本曲など民間芸能の曲本(台本)や、宗教書などに用いられることがあった[張錫祿等主編 2011]。侯冲は白文の使用用途や使用範囲の狭さから、民族文字として普及することは難しいと考えた[侯冲 2002: 126]。

雲南において漢字を用いて自民族語を表記する方法は、八世紀半ばから一〇世紀初頭の南詔国時代からみられる。宋・李昉撰『太平広記』巻四八七「蛮夷四・南詔」には、『玉溪編事』を引いて南詔国の清平官(宰相)である趙叔

達の詩が載せられている。

法駕避星回

法駕は星回の明かりを避け

波羅毘勇猜

波羅や毘勇さえも彼が誰なのかを猜った

河澗氷難合

河は広く氷が張ることもむずかしい

地暖梅先開

大地も暖かくなり、もう梅の花がほころんだ

下令俚柔洽

皇帝は俚柔が仲むつまじくたれと命ぜられた

獻琛弄棟来

人びとは珍しい宝を獻じて弄棟(今の姚安県)より赴いた

願將不才質

願わくは、この不才をもつて

千載侍遊台

永くこの遊台にて皇帝のそば近くに侍っていたものだ

同詩には漢語では解釈できない語句が含まれている。たとえば「星回」(たいまつ)について、たいまつのことを現代白語でも「xif hait」⁽¹⁾と発音する。南詔国語と現代白語との関係はなお不明な部分が多いものの、「星回」は南詔国語の「たいまつ」に相当する語彙に対し、漢字を用いて表記したものだ⁽²⁾と解釈できる。また『太平広記』の同詩に対する注には「波羅は虎なり。毘勇は馬なり。驃信は昔、ここに幸し、野馬や虎を射たことがある」「俚柔は百姓

なり」とある。現代白語では「laot」と発音するので、「波羅」という語彙とある程度の関連がみられる。

「毘勇」や「俚柔」という語と、現代白語との関連はわからないものの、とにかく南詔国語を漢字で書き写すという方法は原理的に白文と同じものだと考えられる。なお前述の注にみられる「驃信」は南詔国・大理国で用いられた君主の自称である。『新唐書』卷二二二中「南詔下」によれば、南詔国七代の尋閣勸(在位八〇八—八〇九)が即位すると驃信と自称した、とある。これも自国語の語彙を漢字によって記す例といえる。

また元朝時代(一二六〇—一三六七)までには史料上、漢語の著作を白文に翻訳していたと推測できる。元・至大庚戌(三年五月甲辰(二八)日(西曆一二二〇年六月二五日)に今の昆明郊外の玉案山箒竹寺に立てられた「大元洪鏡雄辯法師大寂塔銘」には、以下の記述がある。

世祖□□破大理之明年、師始至中國、留二十五年…中略…其歸□而國人號雄辯法師。□鳥隸人說法□□□嚴經・維摩詰經□□□□以隸人之言、於是其書盛傳、解其益衆。

同碑文には欠損が多いものの、清・康熙年間(一六六二—一七二二)に積圓鼎が著した『滇積記』卷一には、前述の

碑文をもとにしたとみられる洪鏡雄辯法師の伝が立てられている。そこには以下のような記述が確認できる。

洪鏡雄辯法師は、善闡城（今の昆明）に生まれた。姓は李氏である。幼い時に国師たる楊子雲に任えて高弟となった。世祖（クビライ・カン）が大理国を破った翌年（一二五四年）、師は初めて中国に赴いた。留まること二十五年、四人の師に仕えた、…中略…其の国（雲南）に帰り、雲南の人たちは「彼を」雄辯法師と呼んだ。師は夔人の言葉を解していたので、本を書いた。その本は盛んに伝えられ、学ぶものは多くなっていた。^①

雄辯法師は大理国時代の雲南の善闡（昆明）に生まれ、夔人（白人）の言葉にも通じていたという。碑文や『滇積記』には明記していないものの、彼自身が白人であった可能性は非常に高い。雄辯法師が夔人（白人）の言葉によって書物を書いたとすれば、おそらく漢字を用いたのであるという指摘がある〔万国瑜 1984: 1059〕。

漢伝仏教の内容を、白人の言葉に翻訳するという例は、後の時代にも見られる。清・康熙癸未歲（四五年）三月朔旦（一日）（西曆一七〇三年四月一六日）序刊、高翁映撰の『鷄足山志』卷二「阿闍世石」条に「阿闍世石は」阿闍世王が迦葉尊者を礼拝したところである。元旦になる

と、数万人が山に向かい、夔談（白語）をもって「方広経」を唱え、この石の所に至る」とある。清代大理地方の仏教霊山の一つである鷄足山の阿闍世石には元旦になると白人が集まり、「方広経」なる白語の経を唱えたという「侯冲等点校 2005: 98」。こうした漢伝仏教の教義内容を、漢語から白語に翻訳するというあり方は、少なくとも元代には始まり、清代を経て現在の大理白族の間にもなお存在する〔張明曾等 2004: 32-33〕。

さらに、少なくとも明代になると白文による碑文が作られるようになり、なお現存している。「山花一韻」と呼ばれる碑文は、明・成化一七年（一四八一）に立てられた「処士楊公同室李氏寿蔵」の裏側に刻まれている。この「山花一韻」碑は、現代の「大本曲」の「三七一五」の形式（後述）をすでに備えている〔周祐 2002: 109-113〕。

さらに大理州喜洲鎮にある聖元寺に「詞記山花咏蒼洱境」（通称「山花碑」）という白文詩の石碑が刻まれた。「山花碑」は、明・景泰元年（一四五〇）に立てられた「聖元西山記」の裏面に刻まれている。このため正確に同碑が刻まれた年代まではわからないものの、「山花碑」も明代碑と考えられている〔雲南省少数民族古籍整理出版規劃弁公室 1988: 4〕。同碑の冒頭部分には以下のように記される（発音と解釈は、徐琳等 [1980] を参考とする）。

〈白文〉 〈日本語訳〉

蒼洱境鏘斲不飽 蒼洱(大理)の風景は見飽きることなく

Cax hbert jex caol gexx bet hux

造化工迹在阿物 自然の営みの痕跡はあらゆる処にあり

Caol hual gu jif zex at vxux

南北金鎖把天關 南北の金鎖(大理の上関・下関)は 天険により

Nad be jif soux bexx heil guert

鎮青龍白虎 青龍・白虎を鎮守となす

Zep qierl nvd bepp hux

この碑文は完全な漢文ではなく、一部分は白語のみによつて解釈しうる。また同碑もやはり、最初の三行が七文字、最後の一行のみが五文字によつて一段が構成される「二七一五」の形式をとり、大本曲のものとは一致する〔段伶 1998: 28-31〕。

さらに明代には、雲南を訪れた漢人にも、白文の存在がある程度知られるようになったと考えられる。たとえば漢代から明による雲南征服までの雲南の歴史を述べた書物として楊慎の『滇載記』がある。同書の後跋には、次のような記述がある。

私は罪にかかわつて〔雲南という〕辺境に送られた。

〔それからというもの〕蒙氏(南詔国)・段氏(大理国)

の歴史を図や書物などで探してみたができなかった。〔これに関する〕書籍を旧家において尋ねてみると、『白古通』『玄峰年雲志』という書物があった。その書物には契文があったものの、その意義は民衆に対する教化も含んでいたため、多少削除・訂正して、読めるようにした：後略。

楊慎は明・正徳六年(一五二一)に科擧の状元(首席)となったものの、嘉靖帝(在位一五二二—一五六六)の継嗣問題を端緒として展開した、帝の生父母などの尊号・祭祀などに関する「大礼の議」にかかわつた。これにより嘉靖帝の怒りを買ひ、嘉靖三年(一五二四)には雲南西部の永昌(今の保山)に流されて軍に充てられた。彼の『滇載記』は、雲南の民間にあった『白古通』『玄峰年雲志』を「削除・訂正して」著されたと述べている。しかも『白古通』『玄峰年雲志』はいわゆる契文(白文)によつて書かれていたと述べている。『白古通』は『白古通記』などの名称で呼ばれ、『玄峰年雲志』とともに現存していない。ただし雲南の地方志などに多く引用され、その佚文は王叔武によつてまとめられた〔王叔武 1981: 50-72〕。しかし現存するこれら佚文はすべて漢文による説話集である。このため楊慎のいう「契文」が、現在の白文と同じものなのかについては、いまだ議論の余地がある。少なくとも雲南に

存在していた「棘文」とよばれる表記法について、明・嘉靖年間には楊慎が言及していたことはいえる。

白文による『白古通記』が清代に至るまで存在していた可能性は、ほかの史料によっても伝えられている。清・康熙四五年（一七〇六）、大理喜洲にある聖元寺の住持である寂裕は『白国因由』という書物を刊刻した〔立石 2004: 263-265〕。この史料は「観音による一八の導き」というテーマを軸に、大理地方の開闢と南詔国・大理国の歴史を説く説話である〔立石 2006, 2010〕。『白国因由』末尾にある寂裕による跋文には以下のような記述がある（引用は立石〔2004: 289-290〕による）。

この場所（大理）におおよそ一八の導きがあるという話は、みな『棘古通』に掲載されている。本〔聖元〕寺の仕切り扉に描かれている内容は、一八の導きのうちの僅かに幾段のみである。…中略…各段の縁由は、もともと棘語であった。ただ棘字はわかりづらいため、棘音を漢語に訳し、みた者はこれで一目瞭然となり、『棘古通』をみていなくとも大体的内容から外れることはなかった。

康熙年間（一六六二—一七二二）に書かれた『白国因由』は、もともと『棘古通』（『白古通』）に基づいているとさ

れる。これは棘字によって書かれていたために、漢語に翻訳して誰にでもわかるようにしたという。明清代になると白文は碑文や歴史・説話集などに用いられ、その一部は、現地の知識人にも知られていたことがわかる。

とはいえ白文の存在は、大理外部の人間に広く知られていたわけではなかった。近代以降、白文の存在が知られ、研究されるようになる。早くは一九四〇年に趙繼曾が前述の「山花碑」を紹介し、碑文の内容を白語によって解釈しようと試みた〔趙繼曾 1940〕。一九四二年に石鍾（石鍾健）は前述の「山花碑」や「故善土趙公墓誌」、やはり前述の「故善土楊宗墓誌」と、その裏面に刻まれた「山花一韻」碑を紹介した〔石鍾健 2004〕。さらに一九五七年にも石鍾健は、これら白文碑を考察している〔石鍾健 1957〕。石鍾健が論文を発表した当時、一般的には白文の存在すら疑われていたものの、石鍾健は大理地方で発見した白文石刻史料によって、その存在をようやく証明した。ただし石鍾健はこの論文の中で、白文が明代（一四世紀後半—一七世紀前半）にはすでに失われたと結論している〔石鍾健 1957: 135-138〕。

しかし実際には、白文は現代に至ってもなお使用されていた。雲南省民族民間文学大理調査隊編著〔1960〕には、「白文」や白文を用いた現在の民間芸能について略述されている。このように一九六〇年代に入り現在まで使用され

る白文の実態が明らかになりつつある。では次に現代の白文と、白文を用いる芸能である「大本曲」について述べていこう。

大本曲について

大本曲は、歌い手と三絃（三味線）の伴奏の二人でおこない、中国の「曲芸」・「説唱」（かたりもの・うたいもの）に近い¹⁶⁾。大本曲の名前の由来は、「大きな本子（テキスト）の曲」である。ひとつのテキストで最低でも二〜三時間は歌われる。伝統的には何昼夜もかけて歌われることもあった。大本曲について、一九五七年には、大本曲の流派のうち、大理盆地の洱海西岸にある大理古城から南に伝わる南腔と、その北側に伝わる北腔との大本曲の音楽を紹介し、楽譜に記録している「楊漢等弾唱・禾雨記積1957」。また大本曲の研究ではないものの、大理白族の民間伝説を題材に、大本曲の音楽をもとに作られた演劇（大本曲劇）の台本がつくられ、発表される「金湧等編劇1957」。ただし歌詞はすべて漢語である。

一九八六年には、楊漢等弾唱・禾雨記積[1957]と同様に、大本曲で用いられる調子の楽譜が紹介され、その芸能についての概要や音楽の特徴・文学性の考察および芸人の小伝などが掲載されている「大理白族自治州文化局編

1986」。

二〇〇〇年には、大本曲芸人である劉沛の伝記と彼が所蔵する曲本六編とが紹介される。同書の曲本テキストは白語部分もふくめて原本の内容が記載されているとおもわれるものの、残念ながら漢語による解釈や音声記号も付されていない。このため白語・白文に通じていないと理解できない部分もある「楊政業主編2000」。同年には、同じく大本曲芸人楊漢の生誕一〇五周年を記念して出版された文集がある。内容は、(1) 楊漢の伝記および回顧録、(2) 大本曲についての評論、(3) 楊漢所蔵の曲本三編の内容紹介（ただし白語部分は漢語訳になっている）、(4) 大本曲の調子の説明と楽譜による紹介、という四編から構成される「李晴海主編2000」。

二〇〇三年には、大本曲の芸能としての概要や様式などが



写真1 大本曲の上演（2016年8月筆者撮影）

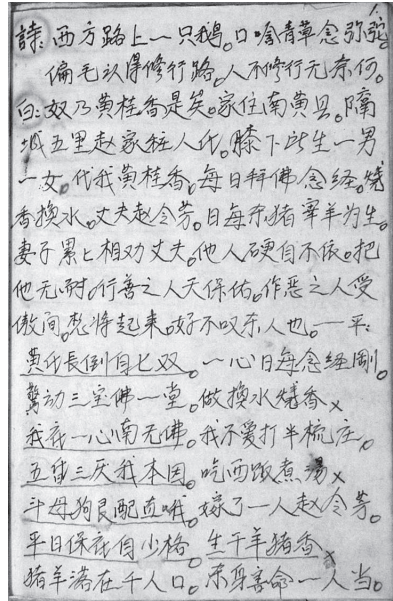


写真2 大本曲曲本

説明される「大理白族自治州文化局編2003」。大理市文化局等編 [2005] では大理市における大本曲に関する調査報告と曲本内容について紹介する。曲本内容の翻訳・釈読としては、張錫祿等主編 [2011] があり大本曲の曲本の内容を明らかにしている。二〇一一年に董秀団は文化人類学的な視点から、大本曲が大理地方におこなわれた歴史的背景や、その芸能の形式、芸人について、さらには社会的機能などを総合的に検討している [董秀団 2011]。やうにフィールドワークをおこないながら大本曲の曲本の表記についての分析をした [遠藤等 2013] がある。

なお伝統的な大本曲の演目は、白族独自の内容のもの少ない [大理白族自治州文化局編 2003: 38]。伝統的な曲

目の八割近くが中国の演劇などから題材をとる [大理白族自治州文化局編 2003: 32-38]。二〇〇三年までの段階で現存の曲本は八二本、演目のみが伝わっているものが六六本、確認されている。さらに現代になって創作されたものが四二本ある [大理白族自治州文化局編 2003: 32-37]。大本曲の演目と解題については董秀団 [2010: 411-436] が参照できる。

曲本は「詩」・「科白」(せりふ)・「歌」より構成される。この形式は、中国の説唱芸能や、民間宗教の宝巻のものと近い。このうち詩と科白とは漢語によって記される。一方、歌は漢語と白文を併用する。白文は下線によって漢語と区別される。歌詞の様式は、基本的に最初の三行が七文字ずつ、最後の一行が五文字の合計四行で一段が構成される。前述のように、この形式は明代の「山花一韻」や「山花碑」の形式とほぼ一致する。

自民族語のなかに漢語、あるいは漢語の中に自民族語を単語単位で挿入・混在させる例は、たとえば満洲人の「子弟書」などの中国非漢民族文学・芸能でもみられる [岡田 2010: 455-457]。しかし大本曲の場合、二つの言語を完全に区別しながら、かつ併存させるという点でこれらとは異なる。また大本曲の曲本は中国の芸能からそのまま白語に翻訳しただけでなく、地名、習俗や季節の情景などの細かい部分において、大理の人々の創作が加わっている。これ

ら曲本は基本的に自分の師匠や別の芸人から借り受けた
り、耳で覚えたものを書き写したりするため、同じ演目でも
芸人によって曲本の細部は異なる。

大本曲の成立年代については、不明な部分が多い。前述
のように大本曲が用いる歌の形式は、現存する「山花一
韻」「山花碑」など白文碑によって明代には成立していた
ことがわかる。現存する最も古い曲本は、清・光緒年間
(一八七五—一九〇八)の写本であり、これ以前の大本曲
の実在は確認できない。しかし白語と漢語とを併用する
という白族の先祖による芸能については、乾隆元年(一七三
六)序のある鈔本で程近仁修『趙州志』巻四「雜記」に以
下のような記述がみられる。

民家の曲。民家の言葉でおこなわれる。声の調べは單
調でなく、音の調子はゆったりとして人を感動させる。
また演じて芝居をすれば〔民家語に〕漢語を混ぜたりも
する。これを「漢蕪楚江秋」とい^⑬う。

少なくとも一八世紀前半には大理盆地南部の趙州(今の大
理市南部から祥雲県・彌渡県にかけての地域)に民家語
(白語)でおこなう曲(曲芸・かたりもの)が存在してい
ることがわかる。これが白・漢併用のかたりものであつた
かは記されていないものの、白語と漢語とを織り交ぜて演

ずる芝居も存在していたとみられる。

また演目について、前述のように伝統的な曲本のほとん
どが中国の芸能からとられている。雲南に中国の芸能がい
つ普及していったかについても不明な部分が多い。しか
し、たとえば前述の四川出身で後に雲南の永昌(今の雲南
省保山市)に追放された楊慎は「升菴(楊慎の号)の北調
(北曲・元曲)は、いまだ雅やかな音律を尽くしている
とは言えないものの、最も素晴らしい」と^⑭いう評価を受ける
北曲の名手でもある。楊慎が雲南に追放されて後、雲南の
知識人たちは多く彼に師事している。このため明代後半期
の雲南に中国の芸能が全く伝わっていなかったとは考え難
い。また明末の旅行家として有名な徐宏祖の旅行記、『徐
霞客遊記』巻一〇「滇遊日記三」には、以下の記述がみら
れる。

〔崇禎戊寅(一一)年〕九月初八日(西曆一六三八年
一〇月一四日)、霑益州(今の雲南省宣威市)の役所よ
り進んで東門に到着した。龔起潜の旧邸に投宿しようと
したものの、その家の門が閉まっているのを見た。怪し
んで門を叩いてみると、ちょうど中で演劇をしていると
ころだとわかつた。^⑮

ここで述べられる「演劇」が中国の演劇そのものであつ

たかは明らかではない。しかし中国の知識人である徐宏祖が「演劇」と認識できる芸能が明末雲南でおこなわれていたことだけはわかる。以上のことから明末雲南には少なくとも知識階級・上層階級の間では中国の芸能が伝わっていたと推測できる。このため大本曲は明代までには白族の祖先の間に存在した韻文の伝統と中国の民間芸能とが融合して、少なくとも清代には作りだされた芸能であると考えられる。

しかしその後の清末から民国にかけての地方志などからも大本曲に関する記述は管見の限り確認できない。大本曲は、当時の知識人からは軽視・忌避すらされてきた可能性がある。たとえば大本曲の演目の多くが中国の民間宗教で用いられる宝巻の内容と一致する「董秀团 2011: 90-93」。宝巻は中国の知識人からは忌避されることがあった(後述)。まず大本曲の代表的な演目の一つ「黄氏女对金剛經」を例にみていこう。「黄氏女对金剛經」は「黄氏女游陰」とも題される演目で、その内容は以下のとおりである。趙令芳の妻である黄桂香(黄氏)は、篤く仏教を信奉し、吃齋して善いおこないを続けていた。彼女が『金剛經』を念ずるたびに冥府では閻魔王府すら揺れてしまうため、閻魔王は黄氏を冥府へ召すこととした。黄氏は冥府の童子に導かれながら地獄を巡り因果応報を目の当たりにする。黄桂香の魂が地獄を巡り、『金剛經』を念じさせられている

間、黄桂香が死んだと勘違いした夫の趙令芳は、妻の体を火葬してしまった。閻魔王の命により、黄桂香は男性として生まれ変わり、富貴を得たという物語である。

この演目に関連して、明代の『金瓶梅詞話』第七十四回「宋御史索求八仙鼎 吳月娘聽黄氏卷」には、「黄氏女巻」という宝巻が読み上げられる場面がある[陶慕寧校注 2000: 981、小野・千田訳 1969: 119-124]。「黄氏女巻」とは、早くは澤田瑞穂が指摘するように「仏説黄氏女看經宝巻」「三世修行黄氏宝巻」、あるいは単に『黄氏宝巻』などとよばれる宝巻である[澤田 1963: 142-143、澤田校注 1972: 106]。宝巻とは当時中国にあった民間宗教の經典のことである。

『金瓶梅詞話』第七十四回の一節の内容は、現存の『三世修行黄氏宝巻』などの宝巻や大本曲『黄氏女对金剛經』の内容と一致する部分がある。大本曲の『黄氏女对金剛經』は、少なくとも明代には中国で知られていた物語が白族の間に伝わったものといえる。しかし『黄氏女对金剛經』の内容は、中国の知識人によっては眉をひそめるものであった。清・道光一〇年(一八三〇)に直隸広平府清河県の知県に任じられた黄育榎は在任中、「邪教」に関心をもち、『破邪詳辯』を著して、一つひとつ宝巻の内容を批判している[澤田 1972: 19]。その中で黄育榎は『仏説黄氏女看經宝巻』を挙げて、地獄巡りの内容が全くのねつ造

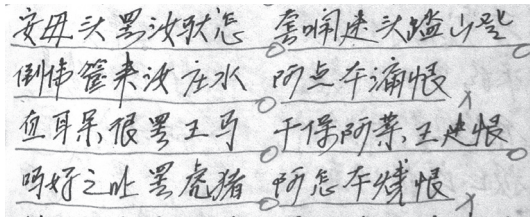


写真3 『鍾美案』曲本 部分

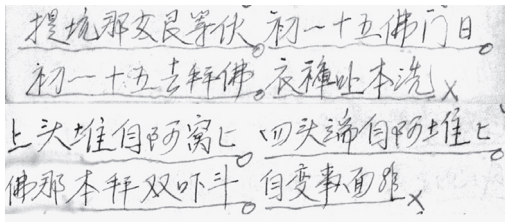


写真4 『黄氏女对金剛經』曲本 部分

として、これを「邪教」と決めつけた[澤田 1972: 107]。本来、宝巻は民間における「勸善」を目的としたものである。現代のわれわれの目からみれば黄育樞の指摘が妥当かどうかは疑わしい。しかし少なくとも中国の知識人たる黄育樞は、「黄氏女对金剛經」の内容を批判すべきと考えた。さらに現存の大本曲の歌詞内容をみていこう。曲本の歌詞中には、「笑料」と呼ばれる部分がある。笑料は荒唐無稽な顛倒歌(あべこべ歌)や一般民衆の生活についてユ-

モアと皮肉を込めて表現する。笑料は直接物語の内容とはかかわらない部分も多いので、複数の演目の中にも共通のものがみられる。まず顛倒歌の一部分をみていくと以下のようなものがある。典拠は、大本曲芸人王祥氏所蔵の『鍾美案』である(写真3参照)。

〈白文〉

〈日本語訳〉

安母頭罷汝駄怎。メス鴨に荷を担がせて、
A maox ded bal svr zet zed

套欄迷頭踏山登。ロバは巢を守ります。
Toul loul mied ded dap sez def

倒偉筐來汝莊水。目籠を使って水を汲んでも、
Daot weix nvx leid svr zouf xux

阿點本漏恨。少しも漏れません。
At dieif bet hhet hel

直耳呆很罷王馬。針の穴に馬を急いで駆けさせます。
Zif nioux daop hel bal wap mex

干保阿菜王通恨。馬を一往復、駆け通させました。
Ga baot at ceil wap tu hel

嗎好之吐罷虎猪。かやぶき小屋の上で豚を火であぶっても、
Ma haot zi nao bal hux deip

阿怎本焼恨。一本(の茅)も焼けません。
At zef bet sv hel

同じく王祥氏所蔵『黃氏女対金剛經』にも、庶民の生活について皮肉やユーモアを込めて以下のように歌詞が記される（写真4参照、また訳文は立石・吉田〔2017:30〕による）。

〈白文〉 〈日本語訳〉

提坑那女良等伙。女どもときたら

ti he nal nvx nid det huo

初一十五佛門日。一日・十五日には寺の門をくぐり

wef yi zip mux weip meid ni

初一十五去拜佛。一日・十五日には仏を拝みに行き

wef yi zip mux ngerd berz weip

衣褲吐本洗。服やズボンも洗いやしない

yif guaf nao bet seix

上頭堆自阿窩窩。三人で集まり座り込み

sal ded zeix zil at wouf wouf

四頭端自阿堆堆。四人で座ってひとかたまり

xi ded zuax zil at zeiz zeiz

佛那本拜雙嚇斗。仏も拝まずおしゃべりばかり

weip nal bet berz sua xiat dou

自變事面非。本末転倒だ

zil bieil miel fei

確証はないものの清代大本曲の曲本にすでに「笑料」が備わっていたとすれば、大本曲は伝統的な中国知識人の目には、大本曲が荒唐無稽・野卑な芸能と映った可能性がある²³⁾。これが清代・民国時代の地方志などに本曲に関する記載がみられない理由の一つだとも考えられる。自身が大本曲芸人であった黄永亮は、中華人民共和国建国以前、大本曲が「高台叫花」（舞台上がり物乞いをするもの）として、²⁴⁾ びげすまれてきたとも述べている〔黄永亮等2000:41〕。

人民共和国建国直後の大本曲

一九四九年の中華人民共和国成立以後も大本曲だけではなく、一部の演劇・戯曲の演目内容は批判すべきものときれた。中国全体での状況であるが、『人民日報』一九五〇年七月二九日第三面の「文化部戯曲改進黨員會組成 首次會議確定戯曲節目審定標準」によれば、中華人民共和国成立直後に中央人民政府文化部が一部の悪影響を及ぼすとみなした演目の禁止を決定している。これに関連して『中華人民共和國公報』一九五七年二期（一九五七年五月七日付）の「文化部關於開放禁戯曲的通知」をみると、やはり一九五〇年から一九五二年まで二六の演目が禁止されていたことがわかる。そしてこれらが「百家齊放」のスローガンのもと、一九五七年に解禁されたということである²⁵⁾。

一九五〇年に禁止されていた演目には京劇の「殺子報」「双釘記」や、北方の民間芸能の一つ、「評劇」での「黃氏女游陰」（「黃氏女对金剛經」と同じ）が含まれていた。これらは大本曲の演目にも存在する「大理白族自治州文化局編 2003: 351」。

一九五七年五月にこれら演目は、文化部によって正式に解禁されることとなった。しかし『戯劇報』の一九五七年第二期の記事のように、解禁後も「黃氏女对金剛經」などの演目に対して批判的な見方が存在していた「鄒幼□ 1957」。その批判の理由として、地獄についての演出描写が極端に劣悪な恐怖のみであるとし、「社会主義時代に、人民の舞台上でこのような劇が出現すれば、どうして人々に大きな苦痛を与えないでいられようか」と述べている。一旦、解禁した演目にもかかわらず、このような批判が出た背景には、この記事が出される同月に反右派闘争が始まったこととも関連しているかもしれない。こうしたなか白族の「黃氏女对金剛經」も唯物論的観点から批判的に紹介されている「雲南省民族民間文学大理調査隊 1960: 275-282」。

それでは中国の伝統的演目に対して厳しい目が注がれる一九五〇年代の大本曲芸人たちはどのように活動したのであろうか。この問題について、大理白族自治州文化局編「2003: 1-8」の記載を中心に、建国後の中華人民共和国全

体との関連から大本曲の活動の意義を探ってみたい。

まず一九五四年に、大理県文化館幹部の馬沢斌が大本曲音楽を基にした演劇である大本曲劇「入社前後」を創作し、民間芸人楊顕臣によって白語に翻訳される。その翌年、同演目は「施善沢入社」に改編され大理の湾橋公社俱樂部で上演される「大理白族自治州文化局編 2003: 27」。董秀団によれば同演目の内容は以下のとおりである。中華人民共和国建国初期に農業初級社（初級合作社）が設立された。しかし農民の施善沢自身が富裕であったため、入社を望まなかった。ところが周辺の援助もあり、認識を改め合作社へ加入することになったという「董秀団 2011: 431」。

当時の中国の政治的状况からみると、一九五二年後半から一九五三年の前半にかけて、「過渡期の総路線」が提唱された。一九五四年まで農村では、二〇〇〜三〇〇戸が農繁期に共同作業をおこなう程度の「生産互助組」が組織されただけだった。その後急速に農業の集団化を進め、一九五六年までにはほとんどの農村が「初級合作社」ないし「高級合作社」に組み込まれたという「久保等 2012: 1521」。同演目の創作には、このような中国全体の社会状況が影響していることがわかる。

一九五六年には、大本曲芸人の楊漢が北京の「全国音楽周」（音楽祭）に出席し、彼が演出した「大理好風光」が上演された。『人民日報』によれば、「第一届全国音楽周」

が八月一日に北京で開催され、その出演者の中に「民族」すなわち白族をはじめとした中国各民族の音楽界関係者四千人が出席すると報道される。さらに推薦されている演目内容として「歴史革命闘争を反映したもの、社会主義建設中の重要事件をほめたたえたもの、軽快な内容で人民の新生活を反映したもの」などがあげられる。この音楽祭は、「百花齊放」のスローガンのもと開催されたとも報道される。⁽²⁸⁾このように同音楽祭には中国の国家建設をたたえる目的があり、大本曲芸人たちもこれに組み込まれたか、あるいは積極的に関わっていくことになる。また同年には、大理において、大理県周城文芸宣傳隊が成立した。頻繁に大本曲・「吹吹腔」が上演されている「大理白族自治州文化局編 2003: 3」。白族の大本曲や吹吹腔が政治宣伝に利用されていったことがわかる。その後も、大本曲芸人たちははじめとする、大理白族の芸人たちと中央との関係がしばしば確認できる。

一九五八年、白族女性杜德平が全国曲芸会にて、大本曲「紅塔」を上演。周恩来主席の接見を受ける。本来、大本曲の上演は男性に限られていた。一九五四年に白族女性の黒必良が舞台にあがって以来、この慣習が破られて現在に至っている。「大理白族自治州文化局編 2003: 2-3」。『人民日報』の記事によれば、一九五八年一月八日に北京において「全国曲芸会」が開催され、漢・モンゴル・タイ・白・

満などの民族が出席し、二〇〇以上の演目が上演された。この会議は公開され、北京の街頭でも上演し、「八一建军節」を祝うための宣伝活動に参加した。⁽³⁰⁾八月四日には、周恩来の接見を受けている。

一九六〇年、大本曲芸人の楊紹仁が第三回中華全国文学芸術工作者代表大会に出席、毛沢東主席ら党と国家指導者の接見をこうむる「大理白族自治州文化局編 2003: 3」。『人民日報』には楊紹仁の名はみられないものの、一九六〇年七月三〇日に、中国文学芸術工作者代表大会が各部会の代表大会・理事会に展開していったと報道される。その中で中国曲芸工作者協会副会長の陶純は、「曲芸」の工作者（職能者）の任務について以下のように述べている。

急ぎ思想改造を行い、新たな曲芸の舞台を拡大・育成する。曲芸創作を發展・向上させ、大いに群衆曲芸創作運動を行う。大胆に曲芸音楽および表現芸術を革新させる。継続的に伝統的曲芸作品を發掘・整理し、農村の人民公社と地域に対して曲芸工作を展開させる。⁽³²⁾

中国の伝統的曲芸は社会主義思想をもとに、新たに創作され、これを農村において展開するよう求められた。楊紹仁が同大会に出席したのも、先にみた大理地方社会での大本曲の役割を期待されたためとおもわれる。また一九六一年

一月二〇日に、中共雲南省委宣伝部が発した「關於建立傣・白・僮・彝四箇民族劇團的通知」（中国戯曲志編輯委員会等 [1994: 708-709] 所収）によれば、大理白族自治州白劇団（吹吹腔・大本曲・白族民間歌舞を含む）が設立された。ただし、これに先立つ一九五九年二月に正式に命名されていたともいう「大理白族自治州文化局編 2003: 3」。そして前述の楊漢・楊紹仁が教員を担当した。この大理州白劇団は、一九六三年前後に多くの現代劇を大本曲や吹吹腔に移植している「大理白族自治州文化局編 2003: 3」。このように大理社会でも大本曲等の現地芸能を通じて、社会主義思想が宣伝されていったとみられる。

これと前後して雲南省文化局が一九六二年四月八日に発した「關於加強戯曲・曲芸伝統劇目・曲目的挖掘工作的通知」によれば大本曲を含む戯曲・曲芸の伝統的な演目を保護するための通達もなされている「中国戯曲志編輯委員会等 1994: 711-712」。

一九六四年一〇月、李明璋・何芳秀の歌唱、黄永亮の伴奏で大本曲「試験田中一枝花」が全国少数民族业余文芸觀摩大会で披露される。毛沢東ら党和国家指導者の接見をことうむったという「大理白族自治州文化局編 2003: 4」。大本曲「試験田中一枝花」が北京で発表されたことについては、『人民日報』一九六四年一月二八日第六面にて写真入りで報道されている。さらに毛沢東による接見について

も、『人民日報』同日付第二面に報道されている。それによれば毛沢東は、全国少数民族业余文芸觀摩大会出席の五〇余りの「少数民族业余文芸戰士」と「中央民族学院新疆幹部訓練班學員」に接見したことが報道される。その後、一九六五年には大理において大理白族自治州大本曲協会を設立するものの「大理白族自治州文化局編 2003: 4」、一九六六年に文化大革命が起ころ。雲南省でも劇団が次々に整理・解散させられていった。前述のように雲南省では、一九六一年一月二〇日には、傣（タイ族）、白（ペー族）、僮（チワン族）、彝（イ族）の四つの民族劇団が設立されていた。ところが一九七〇年六月二〇日付の雲南革命委員会「關於雲南專業劇團人員狀況的報告」に、雲南省の地方での專業劇団の状況が記されている「中国戯曲志編輯委員会等 1994: 743-744」。これによれば雲南省に三つあった民族劇団が文革開始後に二つに減らされ、この報告書が出された段階で全くなくなった。そのうち白劇団は一九七〇年に消滅しており、残された少数の人たちは大理州文芸宣伝隊に参加したという「中国戯曲志編輯委員会等 1994: 457」。

この後、大本曲に関わる活動が明らかになるのは文革終結以降のこととなる。文革時期に大本曲の活動が押さえつけられていたとおもわれる。たとえば芸人たちが芸能の禁止をこうむったり拘束されたことは前述の楊漢や劉沛の伝記からもかいまみえる「李晴海 2000: 8」、楊政業主編 2000:

「す」。文革中の大本曲と芸人たちの動向の詳細は、現状で史料上確認できないため、今後の課題となる。

大本曲の現状

文革終了後、大本曲の活動も徐々に表にでてくるようになっていく。また前述したように大本曲に関する書籍も多くなっていった。さらに近年になりメディアの発達によって、大本曲のVCD（ビデオCD）なども現地でも販売されるようになった。大理の街や村を歩いていると、まれにこれらが鑑賞されている場面にも出くわす。現在でもそれの需要があるとおもわれる。

しかし大本曲の将来は、それほど楽観的なものではない。董秀団が二〇〇四年の段階で把握している大本曲の歌い手は、わずかに二〇名である。しかもそのうち四〇代の芸人はわずかに一人だけである〔董秀団 2004: 239-242〕。董秀団がこの段階で把握していない芸人や、これ以降に芸人になった者がいたとしても、現状でもやはりその人数は二〇人を超えないと考えられる。文革終了後、大理地方では大本曲をはじめとする伝統芸能の保護、芸人の養成が試みられている。しかし大本曲芸人が増加しているとは考えられない。そうしたなか、現在も芸人として活躍している人たちは、どのような活動をしているのであろうか。

大理古城内の清代建築の一つである蒋公祠は、現在では一般に開放され白族文化を紹介する施設であり、中国国内の観光客も多く訪れる。蒋公祠では大本曲の上演もおこなわれている。私は二〇一五年三月一五日にここを訪れて、現地でも有名な大本曲芸人である趙丕鼎氏による大本曲の上演を拝見・拝聴できた。趙丕鼎氏は「国家級民族文化传承人」にも認定されている。しかしここを訪れる多くの観光客はツアー中で時間も限られていることもあるだろうが、大本曲の上演を好奇の目で一瞥したり、写真を撮ったりするだけで、内容自体に関心を示す様子は、ほぼなかった。上演は休憩をはさんで一時間半ほどおこなわれた。趙氏によると客がいなければ途中で切り上げることもあるという。趙氏の一家は息子・娘も大本曲の歌い手で、この日、趙氏の伴奏を務めていたのも彼の孫であった。また趙氏一家は同じく大理古城内にある電影博物館でも毎週金曜日に大本曲の上演をおこなっている。

このように趙氏家では、一家を挙げて大本曲を盛り立てようとしているものの、大本曲芸人の中で、このような取り組みはむしろまれである。もともと大本曲芸人のほとんどは、芸能活動だけで生計を立てているわけではない。大本曲芸人の数は減少しており、後述するように、伝統的な白文の曲本を一冊歌い切れる芸人はかなり少ない。蒋公祠の例でもわかるように、大理地方では大本曲を観光資源と



写真5 大本曲 VCD



写真6 蒋公祠での大本曲上演 (2015年3月筆者撮影)



写真7 大本曲上演の揭示 (2015年3月筆者撮影)



写真8 反邪教を宣伝する大本曲の上演

して利用しようとしているものの、実際にはうまくいっていないようにおもわれる。しかも趙氏のように、観光施設で伝統的な大本曲を披露すること自体まれなことである。芸人が大理盆地にあるいくつかの観光施設の中で、観光客に対して大本曲を披露することがある。しかしこうした場合は、大本曲の曲調を用いて漢語で数分間歌うという場合がほとんどである。また春節などの「節日」（祝日）の際に、呼ばれて伝統的な大本曲を上演する場合もある。ただ



写真9 麻薬・賭博を戒める本子曲VCD

さらに現在の大本曲は政府の宣伝活動などにも利用されることがある。これは前述のように、すでに五〇年代からおこなわれていることである。たとえば政府が「邪教」や「迷信」とみなす民間宗教を信じないように大本曲を通じて宣伝したりする場合がある。また大本曲ではないものの、大理の北部方言地域でおこなわれている「本子曲」では、麻薬や賭博を戒める内容のVCDも発売されている。本来的に大本曲には「勸善」の要素が備わっている「董秀

政府関係のイベントなどに招かれた場合、白語を用いた伝統的な曲本一冊全部を歌うことはほとんどない。このため比較的年齢の若い大本曲芸人の中には、白文に通じていないものも存在する。

また大本曲を宗教活動の中に取り入れる動きもある。大理地方の習慣では、人が亡くなった際、現地では祭文を読み上げるが、祭文の作成・読み上げを大本曲芸人に依頼することがある。祭文を大本曲の形式で歌い上げる方法は、それほど古いものではないという。黄永亮氏の教示によれば、大体三〇年ほど前から始まったという。大本曲芸人たちは自らの技術・知識を葬礼の中で生かそうとしていると考えられる「立石 2014: 79-80」。

団2011: 95-98¹⁾。このため政府が広めようとする道徳上の宣伝活動と結びつく傾向がみられると考えられる。

おわりに

以上、駆け足で白族とその芸能である大本曲についてのその歴史と現状を紹介した。

まず大理白族の白文は、南詔国時代よりその原型がみられ明代には確立している表記法である。白族の民間芸能である大本曲はこの白文と漢文とを用いて台本が記される。大本曲の台本が漢文のみで記されるのではなく、白文という独自の表記法が用いられたのは白語の「音」を書き記す必要があったためである。確かにこの芸能の演目のほとんどは中国の伝統的な芸能から採られたものである。漢語との併用ながら、自らの言語を用いて上演し、その歌詞を独自の表記法によって記しているという意味では、大本曲は白族独自の民間芸能といえよう。

ただし全体的な傾向として、大本曲は消滅の危機にある。大本曲が中国国内で発展する上での大きな障害は、大本曲の特色そのものである「白語」という言語にある。大本曲が大多数の漢族や、すでに白語を話さない都市部の白族の若者に興味をもたれるためには、聞き取れない白語はむしろ邪魔なものとなる。しかし白語を捨てれば民族芸

能としての大本曲としての特徴は失われてしまう。大本曲を存続させようという積極的な動きはあるものの、存続するかどうかは結局これを聞く側の問題である。そして大本曲の消滅とともに白語の音を書き記す方法である「白文」の伝統も、少なくとも大理盆地内では失われることであろう。

二〇一〇年から私に大本曲の曲本の読み方を指導くださったっている黄永亮氏から次のような言葉を聞いたことがある。「京劇ですら国の保護がなければ今のように盛んに伝わることはなかった。少数民族の芸能が保護なしで今後残るとは思えない」。大本曲が今後どのように存続するか、あるいはしないのか、これからも注視していくことにしたい。

注

〈1〉ただし怒江傈僳族自治州の碧江県は一九八六年に廃止され、同州瀘水県と福貢県とに組み込まれている。このため怒江方言とも呼ばれる「王鋒編著 2014: 31」。

〈2〉western town は大理州喜洲鎮のことだとされる。

〈3〉信直日、斃人也、姓段氏。其先世爲大理國王。

〈4〉『明実録』洪武一五年閏二月癸卯（西暦一三八二年四月七日）条。

- 〈5〉滇郡迤西諸郡、強半有之。習俗與華人不堪遠。
- 〈6〉趙州・雲・賓類多漢人、太和・鄧・浪類多白人。
- 〈7〉『人民日報』一九五六年八月二七日第四面「民家族改称白族」。
- 〈8〉波羅虎也、毘勇馬也。驃信昔年幸此、曾射野馬并虎。
- 〈9〉俚柔百姓也。
- 〈10〉元和三年、…中略…（異牟尋）子尋閣勸立、或謂夢湊、自稱「驃信」、夷語君也。
- 〈11〉洪鏡雄辯法師、生善闡城。姓李氏。少時國師楊子雲爲上足弟子。世祖破大理之明年、師始至中國。留二十五年、所更事者四師、…中略…歸其國。國人號雄辯法師焉。師解粵人之言、爲書、其書盛傳習者益衆。
- 〈12〉阿闍世王礼尊者處。歲元旦、朝山者数万、以麩談誦方広経者、至此石。
- 〈13〉『明実録』嘉靖三年七月辛卯（西曆一五二四年八月二七日）条、『明史』卷一百九十二「楊慎伝」。
- 〈14〉石鍾健や侯冲は、『白古通玄峰年雲志』という一書と考えている〔石鍾健 2004: 15-17、侯冲 2002: 28-32〕。
- 〈15〉此處蓋有十八化云、備載麩古通。其本寺隔扇所圖繪者、十八化内僅有幾段、…中略…。逐段緣由、原是麩語、但麩字難認、故譯麩音爲漢語、俾閱者一見了然。雖未見麩古通、而大概不外于斯。
- 〈16〉大理市歴史文化研究所の協力で同研究所のウェブサイトを利用し、大本曲『鋼美案』の上演映像を公開している（演唱：王祥氏、伴奏孫金堂氏、撮影：立石謙次、撮影

- 日：二〇一一年一月三一日）。<http://i.youku.com/UMTc1MDM2OTczMg==/>（最終閲覧日二〇一六年九月二二日）。
- 〈17〉民家曲以民家語爲之。聲調不一。音韻悠然動人。亦有演作戲劇者、或雜以漢語。謂之漢麩楚江秋。
- 〈18〉明・王驥德撰『曲律』卷四「升菴北調未盡閑律然最有佳者」。
- 〈19〉明・鄒應龍修、明・李元陽纂、万曆『雲南通志』卷一〇「官師志第六之二・永昌・楊慎条」「滇之士人多師之」。
- 〈20〉由霑益州署前抵東門。投舊邸龔起潛、見其門閉、異之、叩而知方演劇於内也。
- 〈21〉後述の『黄氏宝卷』などには「趙連芳」と表記するものもある。
- 〈22〉早稲田大学附属図書館HPの「古典総合データベース」には、『三世修道黄氏宝卷』など、「黄氏女对金剛經」に関連する内容をもつ宝卷の原本画像が数点紹介されている。 <http://www.wul.waseda.ac.jp/konsensei/furyobunko/hokan.html>（最終閲覧日二〇一六年九月二二日）。またこれら宝卷の解題については、澤田〔1963〕、澤田校注〔1972〕参照。
- 〈23〉たとえば明・王驥德撰の『曲律』卷三によれば「元人諸劇皆佳而白則猥鄙俚褻不似文人口吻」（元朝の人の多くの劇は素晴らしいものの、セリフが猥雑で野暮ったく、文人の口ぶりには似合わない）として、明代中国の知識人は元曲の野卑なセリフまわしを嫌っていた。
- 〈24〉一九五二年一月八日～十四日に「百家齐放」のスターガンのもと開催された、「全国戯曲観摩演出大会」の

決定によって伝統的戯曲の演目上演の禁止が緩められている（『人民日報』一九五二年一月一六日第二面「全国戯曲演出大会昨閉幕 周総理出席閉幕典禮並講和」）。

〈25〉一九五六年六月および一九五七年四月の二度にわたり、北京にて「全国戯曲劇目工作会議」が開かれて、「演目の発掘・改編及び創作」の問題が討論されている。一九五七年五月一七日の解禁は、これに関連した動きであるとおもわれる（『人民日報』一九五六年六月一七日第三面「大力発掘整理伝統劇目 拡大和豊富上演劇目 把戯曲芸術推向新的繁榮」、『人民日報』一九五七年四月二七日第一面「全国戯曲劇目工作會議確定大放手地発掘和整理伝統劇目」）。これら会議の内容については、『戯劇報』一九五六年第六期（二五頁）、同一九五七年第九期（九頁）や予均〔1957〕のおこしも述べられている。

〈26〉在社会主义時代、在人民的舞台上、出現這樣的戲、怎不使人感到無比的苦痛？！

〈27〉「第一届全国音楽周的籌備工作在積極進行」『人民日報』一九五六年七月二四日第七面。従已經推薦給音楽周籌委會的節目来看、新作品的題材非常広寬、有的反映了歴史革命闘争、有的歌頌社会主义建設中的重大事件、也有用輕鬆活発的題材来反映人民的新生活。

〈28〉「全国音楽周上群英会演 百花齐放演出近七百箇作品」『人民日報』一九五六年八月二七日第一面。

〈29〉吹吹腔は噴納（チャルメラ）を伴奏とする白族独自の演劇である「雲南省民族民間文学大理調査隊編著 1960:

295-300」。

〈30〉「全国曲芸会演在京開幕」『人民日報』一九五八年八月二日第七面。

〈31〉「周総理觀看曲芸演出」『人民日報』一九五八年八月五日第四面。

〈32〉今後曲芸工作者的任務是：加緊思想改造、擴大培養新的曲芸隊伍；發展和提高曲芸創作、大搞群眾曲芸創作運動；大胆革新曲芸音楽及表演芸術；繼續發掘・整理伝統曲芸作品、面向農村人民公社和地区開展曲芸工作。「全国文代会按系統分別舉行會議 作協、劇協、音協、美協等單位的負責人作了關於工作成就和今後任務的報告」『人民日報』一九六〇年七月三十一日第五面。

〈33〉趙丕鼎氏によるこの大本曲の上演はいかなる経緯で放されたかは調査できていない。映像については、youku 優酷サイト上で確認した。http://v.youku.com/v_show/id_XNzU50DMwNzQ4.html?beta&from=st1.8-1-1.2&spm=0.0.0.10UMiy（最終閲覧日時二〇一六年八月二四日）。

参考文献

〈日本語〉

遠藤耕太郎等 2013 「東アジアにおける「声の伝承」と漢字の出会いについての研究——中国雲南省ペー族文化と日本古代文学」『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』第一九卷第二号、一―二六四頁

- 岡田英弘 2010 『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店
- 奥山憲夫 2003 『明代軍政史研究』汲古書院
- 小野忍・千田九一訳 1969 笑笑生著『金瓶梅』下、平凡社
- 久保亨等 2012 『現代中国の歴史——両岸三地一〇〇年のあゆみ』（第三版）東京大学出版会
- 澤田瑞穂 1963 『宝巻の研究』采華書林
- 澤田瑞穂校注 1972 黄育榎著『校注 破邪詳辯——中国民間宗教結社研究資料』道教刊行会
- 立石謙次 2004 『白国因由校注』『アジア・アフリカ言語文化研究』第六七号、二六三—二九一頁
- 立石謙次 2006 『清初雲南大理地方における白人の歴史認識について——『白国因由』の研究』『史学雑誌』第一一五編第六号、三九—六四頁
- 立石謙次 2010 『雲南大理白族の歴史ものがたり——南詔国の王権伝説と白族の観音説話』雄山閣
- 立石謙次 2014 『変わる墓葬——雲南省大理地方を中心に』『中国21』Vol.41、六二—八六頁
- 立石謙次・吉田章人 2017 『大本曲』『黄氏女対金剛経』の研究——雲南大理白族の白文の分析』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 林謙一郎 1996 『元代雲南の大理総管』『東洋学報』第七八巻第九号、一—三五頁
- 牧野巽 1985 『雲南民家の祖系伝説』『牧野巽著作集中』
- 国の移住伝説 広東原住民考』第五巻、御茶の水書房、一三八—一六〇頁
- 横山廣子 1987 『大理盆地の民族集団』『東洋英和女学院短期大学研究紀要』No.二六、三九—五二頁
- 〈中国語〉
- 大理白族自治州文化局 1986 『白族大本曲音楽』雲南人民出版社
- 大理白族自治州文化局編 2003 『大本曲簡志』雲南民族出版社
- 大理市文化局等編 2005 『大本曲覽勝』雲南民族出版社
- 董秀团 2011 『白族大本曲研究』中国社会科学出版社
- 段伶 1998 『白族曲詞格律通論』雲南民族出版社
- 方国瑜 1984 『雲南史料目錄概説』中華書局
- 方国瑜 2003 『明代在雲南的軍屯制度与漢族移民』『方国瑜文集』第三輯、雲南教育出版社、一四五—三三二頁
- 侯冲 2002 『白族心史——『白古通記』研究』雲南民族出版社
- 侯冲等点校 2005 『『鷄足山志』点校』中国書籍出版社
- 黄永亮等 2000 『建国以来大本曲芸術の新発見』『雲嶺歌声』二〇〇〇年三、四—一四三頁
- 金湧等編劇 1957 『上関花』雲南人民出版社
- 李晴海主編 2000 『白族歌手楊漢与大本曲芸術』遠方出版社
- 石鍾健 1957 『論白族的白文』『中国民族問題研究集刊』第六輯、一一五—一四四頁
- 石鍾健 2004 『大理喜州訪碑記』楊銳明主編『大理訪碑集』天馬圖書有限公司、一—三四頁（初出は1942 雲南

- 省立龍淵中学『中国边疆問題研究専刊』、原文未見)
- 陶慕寧校注 2000 笑笑生著『金瓶梅詞話』人民文学出版社
- 王鋒編著 2014 『白語大理方言基礎教程』中央民族出版社
- 王叔武 1981 『雲南古佚書鈔』雲南人民出版社
- 徐琳等編著 1980 『白文』『山花碑』『祝詠』『民族語文』一九八〇年第二期、五〇—五六頁
- 徐琳等編著 1984 『白語簡志』民族出版社
- 徐漢等彈唱・禾雨記訳 1957 『大本曲音楽』雲南人民出版社
- 楊政業主編 2000 『劉沛先生大本曲曲本集』大理白族自治州文化局
- 楊応新等編写 1995 『白文教程』雲南民族出版社
- 予均 1957 『促成戲曲劇目新的繁榮——記第二次全國戲曲劇目工作會議』『劇本』一九五七年第六期、四〇—四二頁
- 雲南省民族民間文学大理調查隊編著 1960 『白族文学史』(初稿)、雲南人民出版社
- 雲南省少数民族古籍整理出版規劃弁公室 1988 『白文』『山花碑』訳訳、雲南民族出版社
- 張明曾等 2004 『白族民間祭祀經文鈔』雲南民族出版社
- 張錫祿等主編 2011 『中国白族白文文献訳詠』広西師範大学出版社
- 趙繼曾 1940 『楊補詠蒼洱境跋一碑文』『西南边疆』第八期、五一—五四頁
- 中国戯曲志編集委員会編 1994 『中国戯曲志・雲南卷』中国 ISBN 中心出版社

新白文（大理方言）と IPA との対応表

声母	
声母記号	IPA
b	p
p	ph
m	m
f	f
v	v
d	t
t	th
n	n
l	l
g	k
k	kh
ng	ŋ
h	x
hh	ɣ
j	te
q	teh
ni	ŋ
x	ɕ
y	ɟ
z	ts
c	tsh
s	s
ss	z

韻母		
韻母記号	IPA	
単純母音	i *	i, ɿ
	ei	e
	a	a
	o	o
	u	u
	e	ue
	v	v
	er	eɾ
二重母音	iai †	ie
	ia	ia
	iao	iau
	io	io
	iou	iou
	ie	ieu
	ui	ui
	uai †	ue
	ua	ua
	uo	uo
	ao	au
	ou	ou
	ier	ieɾ
	uer	ueɾ

声調*			
声調記号	声調	緊喉	濁音化
x	33		○
p	42	○	
t	31		○
l	55		
f	35		
記号なし	44	○	
z	32		
d	21	○	

注：
 ※新白文「z, c, s, ss」に接続する韻母「i」は、[ɿ]と発音される。
 †漢語の借用語に多くみられる。
 *新白文の声調は韻母の後ろに付す。

出所：中国の研究者の論著には、独自の IPA の用法がみられ、また研究によって音韻の分類方法は異なる。本書では徐琳等編著 [1984: 116-127, 113-136]、楊応新等編写 1995: 7-24]、王鋒 [2014: 21-35] をもとに作成。

周祐 2002 『大理古碑研究』雲南民族出版社

郷幼□ 1957 「黄氏女游陰」太悪劣了！」『戲劇報』一九五七年第一二期、二二五頁

「記全国戯曲劇目工作会議」『戲劇報』一九五六年第六期、二五頁

「記第二次全国戯曲劇目工作会議」『戲劇報』一九五七年第九期、八一—九頁

〈英語〉

Fitzgerald, C. P. 1941 *The Tower of Five Glories: A Study of The Min Chia of Da Li, Yunnan*, London: The Cresset Press.

Hsu, Francis L. K. 1971 *Under the Ancestors' Shadow: Kinship, Personality, and Social Mobility in China*, California: Stanford University Press, 1971. (初出 1949)

〔付記〕 このたび、本稿で言及させていただいた黄永亮先生が逝去されたという報に触れました。黄永亮先生には二〇一〇年より私の大本曲の研究に関して、献身的といつてもいいぐらいに指導・協力していただきました。私の大本曲研究が途半ばであるこの時期に、黄先生とお別れしなければならぬことはとても悲しく、残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。